
夢の涙

鮑心繫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の涙

【Nコード】

N4085C

【作者名】

鉤心繫

【あらすじ】

イジメは突然はじまった。毎日放課後になったら呼び出されて蹴られた。これはいつまで続くの？私はいつまでもがき続けていた。

始まりは裏切り（前書き）

「イジメラレルヒト」が悪いわけではない。
「イジメルヒト」がわるいんです。

始まりは裏切り

あの日私は夢を見ていた。

ハヤクキエロ。

怖くて逃げ出しそうになって……

ただ見えるのは……

一筋の光だった。

「あんたなんか消えてしまえ。」

毎日のようにつぶやかれるこの言葉はもう日常的になってしまった。
そう……イジメ。

私は何が理由でこうなったのかは知らないが、気付いたら、こうなっていた。

はじめははずされているだけだった。

けれど……いつの間にかエスカレーターしていった。

あと一年……あと一年経てばこんなイジメはなくなって高校へ逃げられる……毎日そうおもっていた。

もちろん私だって悔しかった。

毎日蹴られて痛い思いをしているのに笑っているあいつらが許せなかった。

この戦いは中学校一年生の後半から始まっていた。
私をいじめる奴は美華といって小学校時代は親友だった。

「私の親友は美華だよ♪」

「ありがとう♪私もだよ（^・^）」

修学旅行のメンバーも一緒。

家も近くだから、集団下校の時も一緒。

集団下校以外でも毎日二人で帰っていた。

そんなある日。

「美華ってさあ…あいつと居て楽しいの？」

「…本当は辛い。けれど、じゃなきゃあの子は一人になっちゃうから…」

「我慢しないでいいんだよ…」

「だけど…かわいそう！」

「うちらがどうにかするからさ…」

「ごめんね…ありがとう。」

…悪口。

大親友が友達に言っていた言葉にひどくショックを受けた。

裏切られたんだ…

憎しみの色で純粹だった心が黒くなり始めていた。

「なんかあいつ臭くね？」

「わかるうww近寄ったら菌がうつるわ」

「ああwww分かる♪」

それからの私は本当に虫よりひどい扱いを受けながら無事小学校を

卒業した。

その頃には私は独りだった。

美華はあっちへ行って、いつの間にかイジメを率先していた。

第二話

ある日、毎日のように地獄を味わっていると、美華があるものを取り出した。

「ちょっと……美華……それはヤバイって……」

「うん……美華、それはやめたほうが良いと思う……」

「ううん♪これ位しなきゃ反省しないから（＾・＾）」

「ナイフは……」

一週間経ったこの日終にナイフを持ち込まれた。

美華はどうして私を怨むの？

毎日思っていた。

けれど……親友だもん。

もう……いいやあ。

もう……生きる事に疲れた。

私は反抗していた体をしずめて手を広げて言った。

「もういいよ……美華……殺しなよ。さっさと殺せばいいじゃん。もう疲れた……」

美華達は驚いた顔をしながら

「何こいつ……マジありえないんだけど」

「うん……頭イッてるわ。」

「……やばいしょ。」

「「行こ」「」」

靴音がだんだん小さくなって……

私：どうして死ねなかった？

美華から裏切られた私：

皆からウザがれた私：

もう生きてる価値なんてないよ。

はやく死にたい：

私は美華が置いていったナイフを胸にあてた。

「バイバイ：美華」

ドンドンドン！！

「誰かいる？」

「今開けるからね！」

ガラッ：

「っ……何してるの？」

「貴方：誰？」

「同じクラスの：坂城さかきだよ：そのナイフ、置こ？」

「ううん：もう死ななきゃ：」

「ダメだよ！！やめて：」

私は泣きながら坂城さんを追い出した。

もう：そんなの偽善としか思えなかった。

ばいばい：

そう呟いて私はナイフをもう一度取ろうとした。

「心ちゃんが死ぬならあたしも死ぬ！！」

坂城さんが隣の教室から鍵を持ってきてまた入ってきた。

「…本当に？」

「うん。心ちゃんの味方だから」

おもわず…偽善ではない…その思いが高まる言葉だった。

「ね…やめよ？」

「……………うん」

私は坂城さんというたった一人の味方を手にした。

私はこのイジメと戦う決意をしたのだった。

次の日から坂城さんまでもがいじめられてたとは言うまでもないが…

「今日もきてねえ♪」

美華からの伝言…

今度は坂城さんと一緒だった。

「てめーら本当ウザイ。」

「チクったら知ってんでしょ！！」

「てかなんなの？何のまね？うちに歯向かう気？」

「百年早いよ（へ・へ）」

「あんたたちはこういう運命になっているんだよ♪」

「そうそう！！神様がこういう運命にしたんだよお W W W」

「怨むなら神様を W W」

「てか神様の所にいきなよ。」

「神様にはあえないんじゃない？こいつら地獄に落ちるから」

「あっそうだったね♪」

そんな事を言われた後、私達はニツコリと笑って反撃をはじめた。

「ねえ：イジメラレル人になんの罪がある？ いじめたひとは：まっすぐ地獄に落ちるんじゃない？ あんたらも地獄に落ちるんだからアタシは地獄であんたらに反撃してあげる♪」

「あっ私も♪沢山！！覚悟しててね」

そして蹴られた足を立たせて歩き、二人は教室を出た。

「「ばいばあい♪」」

美華達はものすごく怒ってるみたいだった。

明日はどうなるかな：

そんな不安はもう消えていた。

私は調子にのり始めていた。

第三話

私はいつの間にか自信を持っていた。

良い意味なのか悪い意味の自信なのかは分からないが。

あの放課後から私は笑うようになった。

「イジメとか醜いwww」

私は坂城さんに笑いながら言った。

坂城さんはこのヒト変わったな：みたいな顔をして私の言葉を聞き流した。

「ねえ私の名前教えてなかったよね。私の名前教えてなかったから名字でよんでたしよ。私、坂城麻衣さかぎあそって言うの。麻衣って呼んでね」
♪

「麻衣だったんだあ。ずっと坂城さんって読んでた（笑）」

私達は美華たちの視線を気にしないで、笑いあっていた。

「なにあれ：美華、」

『調子にのってきちゃったみたいだね。お仕置きしなきゃ…』

「ちよっ：ナイフは止めようね：？」

『マジギレしたら使っちゃうかもおwww』

「もおwww」

『もしナイフで切りつけても：味方だよ？』

「もちろん！なに言ってるの？ズット美華の味方だよ♪」

『良かったあ。また裏切られたら美華：死んじやう：』

美華はわざと私達に聞こえるように言った。大声で。

そしてチラ見をしながら笑った。

「ちょっと…裏切ったってどういう事!？」

私は我慢が出来なくて話したくなかったけれど美華のもとへ行きたずねた。

『実際ココちゃん美華のこと裏切ったショｗｗｗｗいまさら何?自分は裏切ってないとも言いたいのか?』

「私は聞いたよ!美華が私といるのが辛いつて友達に言ってたこと…そのときから私は美華に裏切られていたんじゃないの?違う?」

『美華…そんな事言っていないよ…美華はココちゃんに裏切られたときすっごい辛かったんだよ…なんでココちゃんうそつくの?そんなに…自分の立場が大事?自分は裏切られたって…それで友達でも欲しいの?美華…そんな友達要らない…うそついてまで…友達なんか欲しくない。ココちゃんに裏切られて…信用できなくなったもん。』
「美華…大丈夫?…心最低!!美華泣かせて…そこまでして自分の意見通したいとかありえない…」

「なんでみんなして美華の意見しか受け入れないの?どうして私が言う事はすべてうそになるわけ?」

『だって…実際そうじゃない。美華の事裏切ったくせに裏切られたとか嘘言うじゃない。全部…嘘じゃない。』

美華は泣いて、取り巻きが慰めた。
けれど、見たんだ。

涙がこぼれるのに抑えている手の奥には笑みがあつたのを…。

「あんた…最低!!!!」

そういい残して私は教室をでた。

麻衣がついてきたことに安心感を抱いていた。

「…心…? あれは…しょうがないんじゃないかな…」

『なんで? 私は嘘なんかついてないよ! …麻衣は信じてくれるよね…?』

「うん…私は心のこと信用してるよ…でも私は小学校時代の事知らないから…全部と一緒に語る事は出来ないよ…。」

『うん。でも信じてくれるだけで嬉しい…私も麻衣の事信じてるから♪』

私達はこの時間で30人というクラスメイトを敵に回した。

もう…神様は逃げ道を作ってくれなかった。

二人で一つ…まさにその通りだった。

『今日も来てよお W W W』

さっきまで泣いていた美華はなく、笑いながら言った。

「しょうがないなあ。行ってあげる♪」

もう…後戻りはできない。

私は…本気だ。

第三話（後書き）

第三話まで行きましたあ。

感想を書いてくださった琉音さんありがとうございました。

第四話（学園戦争）

…あれから私は考えてみた。

どうしていじめられなければいけない？

私はどうしてやられっぱなしなのか？

どうしてやり返さないのか？

今日のあの時間…初めて反抗をはじめた。

気持ちよかったな…

私はなにが怖いんだろう…？

何も怖がる事などありやしないのに…。

『やっと来たWWW』

「はあい。お待たせ。今日はなに使うわけ？なに使ってアタシをいじめるの？ナイフ？なんでも使いなさいよ。十倍にしてやり返すから。」

『『何こいつ…超むかつく。美華…いいんじゃない？使いなよ。ナイフ使ってもいいって心言っただじゃん。』』

『超怒った。あんたマジで言ってるの？…ハヤクキエロ。』
「あんたこそ」

この日私は爆発。

こらえられない怒りと共に美華にぶつけた。

沢山ぶつけた。

五時に呼び出されてから二時間が経過していた。

「美華：あなたはいつも私にこうしてたんだよ？反省した？」

『は？バカじゃないの？なにが反省よ！裏切っというて。』

「へえ：だったら最後はこれだね♪」

そう…。

私を取り出したのは…ナイフ。

あの地獄を今は繰り返し返している。

私本人が。

もう…スッキリすると思った。

『ココちゃん：ごめんね…やめて…すみませんでした…すみません…やめて…それだけはやめて…？』

『心！！やめなさいよ！』

「は？麻衣：あんた美華の味方なわけ？麻衣の痛みと私の痛み…美華に味わせてるんだよ？これは…悪い事なの？」

『わるいことにきまつてんじゃない！あんたは美華と同じ事をしたんだよ？美華と同類なんだよ？』

「それでもいい！私の痛み…味わせテやる…。」

『麻衣ちゃん：助けて…』

「は？美華：バカにしないで。ふざけんなよ。」

私は怒りに狂ってナイフで刺そうと思った。

けれど…できなかった。

刺したかった。

けれど…隣には麻衣がいたんだ。

謝らなかつた。

なぜか…悪い事とは思わなかつたから。

八時…最高下校時間がきた。

「明日も来るか？私。美華私をいじめるんでしょ？私を蹴るんでしょ？私明日も来て上げる♪」

美華は返事をしなかった。

たぶん：できなかったのかもしれない。

三時間ずっと殴り続けていたのだから…。

今思えば凄く怖い事だ。

私はそれでも立ち止まらなかった。

：ずっといじめられてきたんだもん。

これ位：序章にすぎないのよ。

そして私は家に帰った。

『心！あんた、美華ちゃんになにしたの？さっき電話がきたの。美華ちゃん怪我したらしいわよ。全治二週間らしいわよ！どうして？』

「あれくらい：だって私が小学校の時裏切られてからずっといじめられてたのよ？美華は私を裏切ったのよ？しかも：ナイフまで持ち込まれた！だから今までの痛みすべてし返したのよ！美華は私を裏切った：」

『心：あんたは間違ってる。』

「なにが間違えてるって言うのよ？私はやり返しただけよ！美華が悪いのよ」

『心は美華ちゃんとおなじことをしたのよ？』

この言葉：麻衣にも言われた…。

私が間違えてるの？

「私が間違えているって言うの？」

『あなただけが悪いわけではない！！けれど：あなたは悪いことをした。人を傷つけた。貴方も美華ちゃんと一緒よ。』

「…っ…」

ーピンポーン

「はあい」

『美華の母です。』

きた。

美華のお母さん…

全部話してやる…

美華が悪いつてこと…思い知らせてやる。

「あなた…小学校のころ仲がよかったっていうところちゃん？ 貴方の話は聞いているわ。美華からね。今の話も聞いているわ。」

『だったらしってるんですね。どういう嘘をつかれましたか？』

「なっ…」

『たぶん貴女はこれから言う事を信じないと思います。けれど聞いてください。』

私は美華と仲がよかったです。けれどあるひ裏切られました。美華に。私の悪口を言っていました。本当はつらい。一緒にいたくない…と。それから私ははずされました。そのまま卒業式もできました。写真と一緒にとってくれる友達に美華しかいませんでした。今まで、けれど私はもう友達も誰もありません。卒業式は証書だけもらいかえってきました。そして中学校生活。もうこのイジメはなくなると思いましたが。けれど次のイジメというのははずすとかではなくて体を傷つけるようなものだったのです。…ショックでした。何度もどうして裏切られたのだろう…そう思いました。そして一週間経ったある日ナイフを持ってきました。もう私はあきらめることにしました。殺して…と頼みました。もちろん私は気持ち悪いといわれてしまいましたけど。私はもう今までの純情な気持ちはなくな

っていました。

私は今までの痛みをすべて美華に返しました。
それが今日です。

すべてを返すのに大体三時間かかりました。

けれど私は自分がわるい事をしたのだとは思っていません。

私はもうこのイジメがなくなるのなら何をされてもいいと思います。
やられたら十倍にして返しますけど。

…私の気持ち………信じないでしょう？

それでもいい。

私は真実を伝えたのだから。』

「心ちゃん…もういいわ。さようなら」

この決断がよかったのかなど誰にもわからない。

けれど私は後悔しないと決めた。

立ち止まらないと決めたんだから。

私は歩き続ける。

どんなことがあっても美華とまた巡り合うことがあっても私はいじめられたらいじめ返す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4085c/>

夢の涙

2010年10月20日15時39分発行